

生態システムと社会システムをつなぐ

文：梶 光一（「野生生物と社会」学会理事・東京農工大学大学院農学研究院教授）



近年の環境問題の緊急性と複雑性から、生態学者は社会科学者との分野横断的な研究に従事することが求められるようになった。従来の生態学では、純粋科学的な立場から「自然条件の」生物と環境のみを対象とし、人間は観察者の立場であった。しかし、最近の20年間では人間を環境改変や、半自然の生態系の維持に関わる外的要因としての行為者として見る立場から、生物のシステムと人間の社会システムが密接に関わって成立するという観点から人間を主体／客体として扱うようになった。社会科学を生態学に合体させることは人間と生態システムの相互作用のみならず、科学が知識、自然そして社会という大きなシステムの一部として、どのように機能するかにも注意を向けさせる。以上のことから、野生生物保護学会から「野生生物と社会」学会に名称変更したことは、野生生物とヒトの複雑な問題の解決に向けて、本学会の今後の方向性を明確にするうえで、必要不可欠なプロセスであったと考える。



獣書の現場で学ぶ：栃木県佐野市で開催した大学1年生向け実習の風景